Gender, Risks, and Leap : From a Post-colonial View

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): Gender, Post-colonialism, Intimacy, Inferiority Complex, Learned Helplessness, Risk, Self-actualization capability, Authenticity, Homo-social, bio-power 作成者: 池田, 緑 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5804

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ジェンダー、リスク、跳躍。

―ポストコロニアルな視点から―

池田　緑*

要　　約

本稿は、ポストコロニアルな状況下での選択の問題として、ジェンダー論やフェミニズムと出会った女性たちが、自立と解放を獲得する条件を考察するものである。親密性と男性権力の関係、ミソジニーとホモソーシャリティの関係を参照しつつ、劣等コンプレックスと学習性無力感が女性の選択に与える影響を検討し、つぎにジェンダー論とリスクの拮抗関係について、その構造を示す。そのうえで、女性にとって必要な“力”とは他者を支配するような力ではなく、自己実現能力であることを指摘する。さいごに、リスク認識を超えて、ホモソーシャルな権力と対抗するためのポリティクスを提起する。

だが戦争は継続する。
―フランツ・ファノン(Fanon, 1961＝1996：243)

はじめに

本稿は、内容において、拙稿「承認の政治における男性権力―モノガミーと性愛の植民地主義への基礎的考察―」(池田, 2008)、「親密性の権力と植民地主義―性愛と権力にかんする基礎的考察―」(池田, 2009)、「承認と親密性をめぐる政治―植民地主義的視点から―」(池田, 2010) で連続して考察してきた諸論点、すなわち承認、親密性、男性権力、ポストコロニアリズム、の４つの問題系を、発展的に考察するものである。本稿では、ジェンダー論やフェミニズムに出会い、変化と停止の間で葛藤を抱えざるをえない女性たちをめぐるポリティクスを、理念モデルを用いて、リスクと真正性を中心に、ポストコロニアリズムの視点から考察したい。

また本稿は、私が普段女子大学において担当している授業（２年生対象）において、授業内容を理解するための補助教材として学生たちに読ませることも前提としている。そのため、ジェンダー論の基本や、すでに他の原稿において既述の内容も、一部重複して紹介している部分があることを付記しておきたい。

１．ポストコロニアルな状況下での選択の問題

現在勤務している女子大学に着任した時、私は国際社会学やコロニアリズム論を専門としており、ジェンダー論はまったくの専門外であった。しかし着任当初私が経験したことは、将来の目標

*大妻女子大学　社会情報学部

（というよりも今思えば漠然とした夢であったろうが）は結婚して専業主婦になること、という多くの学生たちとの出会いであり、婚姻に直結しない情報に対して無関心な彼女らを目の前にして、どのように学問の意義を伝えたらよいのかという逡巡であった。折しも、着任の翌年度よりジェンダー論を含む必修科目を担当する予定があり、なぜ一部に婚姻に人生において至上の価値をおく学生たちが存在するのか、そのことを理解するためにも、泥縄式にジェンダー論の勉強を始めた経緯がある[1)]。

ジェンダー論を学ぶなかで気がついたことは、ジェンダー論で焦点となっている権力関係のいくつかの局面が、それまで私が関わってきた日本と沖縄におけるポストコロニアルな関係性と近似した構造を有していることであった。わかりやすく言えば「この話はどこかで聞いたことがあるような気が・・・。ああ・・、沖縄のあれか・・・」という体験である。

鵜飼哲はポストコロニアリズムの「ポスト」という接頭辞の含意について、それはコロニアリズムの終焉を意味するものではなく、一般の意識においては過去とみなされていながら、現代のわれわれの社会性や意識を深く規定している構造にかかわるものと述べている（鵜飼，1998：42）[2)]。コロニアリズムの支配様式には、その根幹に制度的な支配体制が存在している（たとえば宗主国による軍事的支配等）。しかし同時に、非制度的な支配の言説やシステムが構築され、それらが相補的に支配を貫徹するために動員される。民族自決権や人権思想のグローバルな適用により、制度的な支配システムは消滅しつつあるが、非制度的な支配言説やシステムは無傷で残り、残存効果として、あるいはより洗練された統治システムとして機能している。これがポストコロニアルな状況の含意である。むしろ制度的な支配システムを必要としないほどに、完成された支配システムが出来上がっていると捉えてもよいだろう。

このことは、現在グローバルな規模で、様々な社会的局面で進行している権力の在り方と共振している。前期近代（early modern）が、国民国家建設を、制度を基盤として達成しようと企図していた時代であるならば、その目的のために被抑圧カテゴリーを設定し、周縁化・資源化するテクニックもまた制度の中に埋め込まれることが多かった。しかし、制度としての支配関係が忌避され、一方で国民国家建設のために発展させられた近代性（modernity）が国民国家の枠を超え、グローバルな市場への貢献性へと再配置される後期近代（late modern）では、制度的な支配体制の温存は許されず、そのテクニックは非制度的なものとして洗練度を高めることになる。後期近代のモダニティが国民国家からグローバルな市場へと舞台を移される（＝グローバリゼーション）に伴って、現代的な支配テクニックであるポストコロニアルな手法は、社会の様々な次元で、かつ地球規模で展開されているはずである。

本稿では、ポストコロニアリズムを地理的空間に留まらない、後期近代における支配の手法、ロジックとして捉えたい[3)]。そのようなポストコロニアルな支配システムを考えたとき、男女の性差にまつわる問題は典型的なものであるといえる。かつて法制度面において女性は明確に男性と不平等であった（選挙権すらなかった）。しかし現在では、法制度面において、（民法における再婚禁止期間の問題は存続しているが）明文化された不平等は存在していない。とくに男女雇用機会均等法（1972，改訂1987，1999）および男女共同参画社会基本法（1999）のように、法制度的には不平等は解消されてきた。しかし一方で、男女の所得についてのデータをみると、たとえば国税庁が実施している「民間給与実態統計調査」では、民間の給与所得者で男性を100とした場合、女性の給与水準は53.1（2010年度）、53.2（2011年度）と、約半分である。またやや古い分析となるが、共働き家庭の所得内訳は、夫を100とすると妻は35.0（1994年度）、36.0（1999年度）となっている（杉橋，2007：119）。

これは男女間の非制度的な不公平を示す一例に過ぎないが、このように制度的に平等であるにもかかわらず、実効的に格差と抑圧が存在する側面は広義のポストコロニアルな状況であるといえ

る。もちろんそこで資源化されているのは女性の労働力であり、他の様々な非制度的システム（たとえばリプロダクション能力の収奪など）と相まってこのような実効的支配は完遂されている。そしてこのようなポストコロニアルな支配関係の一つの特徴は、そこで行使される権力が規律と従順さ、秩序といったものによって形作られるある種の「生―権力（bio-power）」として解釈可能という点にある。そしてフーコーの指摘にもあるように、多くの場合、そのような「生―権力」は従わせる側の介入と従う側の（結果的な）協力、すなわち抑圧者と被抑圧者との間の一種の共犯関係によって成立するのである。その場合、支配と権力の実践は、「心の領域」とでもいえる場で行われることになる。このような問題意識を背景に、本稿では、性差とポストコロニアルな権力の在り方が、後期近代において交差している領域を念頭に、それを前提として話を進めることにする。

話を戻す。現在の職場に着任後、ジェンダー論を漁りはじめ、次々と様々な文献を読んでいたとき、鈴木淑美「S系女子大生という生き方」（鈴木，2002）が目に留まった。自身の女子大学における教育経験をもとに書かれたこの文章の中で、鈴木は良妻賢母概念と親和性の高い価値観が蔓延し、男性社会の欲望に応えるような学生を（結果的にではあっても）輩出する構造を備えた女子大学を“S系女子大”と表現した[4]。ここで書かれていた女子大学内の諸様相は、いずれも私自身の日々の体験と一致するもので、普段自分が言語化できていなかった違和感を見事に表現した文章として、刺激的なものとして読んだ。

なかでも考えさせられたのは、たとえば、フェミニズムに代表される女性解放思想に耳を閉ざし、絶対に受け入れず、自分の価値観を揺るがすような言葉には頑として耳を貸さない学生が存在しているという内容の指摘であった（鈴木，2002：75－76）。さらに鈴木はそのような“S系女子大生”の傾向は、入学前の時点である程度確立されていると指摘している（そのような傾向の高校生が“S系女子大”を選択するということでもある）。この指摘には、様々な論点が含まれていることが実感された。考えてみれば、大学には、様々な知識や視点、方法論を学ぶことによって、自らの視野を拡げ、多様な価値観や社会的文脈を理解する方法を身に着ける場という側面がある。これは教養主義に代表される、高等教育機関としての大学が、その内部的専門分野を問わず担ってきた社会的機能でもある。具体的な文脈に則して言えば、たとえばジェンダー論やフェミニズムを知り、それを自分自身の考えとして受容する必要はない。しかし、なぜそのような考え方や視点が社会に存在しているのか、それを理解することは大学生として必要なことである。しかし、耳を閉ざし、あるいは頭の中を素通りしているに近い反応を示す学生は、自身の価値観の再確認を目的に大学で学んでいることになり（自身の価値観にそぐわないものは拒絶しているのだから）、大学での学びの重要な側面から、自らを排除してしまっていることになる。きわめて不思議な存在ということである。

実際、ジェンダー論やフェミニズムに触れることによって、自分自身のそれまでの経験を再解釈し、価値観や言動が変化する学生も中には存在する。いわゆる「化ける」というパターンである。ただし、まったくの印象論としてだが、そういう学生はそれほどたくさん見かけるわけではない。しかし、そういった学生の中には、ジェンダー論を通じた変化によって、自分を取り囲む世界がそれまでとはまったく違ったものに見えるようになった、世界が変わった、と言う学生もいる（もちろん、変わったのは世界ではなくその学生本人であるが）。話をわかりやすく進めるために、このようなタイプをここでは仮に＜変化モデル＞と呼ぶことにしたい。

その一方で、鈴木が指摘するように、ジェンダー論やフェミニズムに対して拒絶反応を示す、あるいは素通りし、ジェンダー論の論点に近づいたり考えたりすることすら頑なに避ける学生も存在している。これまた印象論として言えば、それほど多いわけでもない。ある意味でこういった学生たちは、確信をもってジェンダー論から距離を置いており、ジェンダー論にかかわることが何か

しら決定的で不可逆的な変化と結びつくように考えている節すら見受けられる。選択科目でジェンダー論に触れた場合、その科目を履修放棄する場合もありうるだろう。便宜的に＜不変モデル＞と呼びたい。正直なところ、当初は私自身も、このような学生たちの存在が不思議であった。鈴木の指摘を受けて、学生の変化／不変の問題を意識するようになったのも、彼女らの存在が気になっていたからでもあった。

残りの大多数の学生は、この間で揺れ動いているように見受けられる。このような学生は、ジェンダー論の授業が進むにしたがって、毎回表情が暗く、険しくなってゆくように感じられる。そのことは、教員としても意地悪をしているつもりはないので、居心地が悪く感じるところでもあった。レポートを提出させると、ジェンダー論のロジックを相当程度に正確に理解していることが窺える、と同時に、心情的な部分において、そのようなロジックを受容する自分自身に戸惑いを感じていることが綴られていることも少なくない。いわばジェンダー論的発想に触れたことによって葛藤を抱え込んでしまうケースで、ここでは＜葛藤モデル＞と仮に呼んでおく。

＜葛藤モデル＞タイプの学生の多くは、ジェンダー論を離れると、再びジェンダーを内面化した行動に戻ることも多いように思われる。大学での年次が上がり、就職活動等で社会に触れ、ジェンダーを強く内面化することを求められる環境に置かれることとも関連すると推測するが、いわゆる“男子ウケ”がよい言動やファッションを身にまとい、戦略的であれ非戦略的であれ、男性を意識した存在となってゆく。わかりやすくいえば、“かわいい女の子”になってゆき、一時期に見せていた葛藤を反映した険しい表情も消えてゆく。このような変化は、私をいつも戸惑わせてきた。ジェンダー論を理解しても、そこから疎遠になり、環境が変わればいとも簡単にそれに同化してしまうのだろうか。そうであるならば、人間とはなんと変わりやすいものか。あるいは、彼女らはもともと強くジェンダーを内面化しており、一時期ジェンダー論に触れ葛藤も感じたが、そこから疎遠になったとたんに、元の姿に戻ったのか。であるならば、人間はなんと変わらないものか。いったいそのいずれなのか、＜葛藤モデル＞の学生たちのその後を見ていて、何度も逡巡を感じた。

なお念のために付記すれば、この３つのモデルはあくまでも論理的なモデルであり、現実の学生を類型化するものではない。この３つ以外にもモデルはありうるだろうし、現実には学生も変化する。また一人の学生の中にも複数のモデルが併存している。ここで考えているのはあくまでも理念モデルであり、行動や選択の契機を論理的に探ることである。

２．“ムハーッ！問題”、親密性、ミソジニー

ところで、＜葛藤モデル＞の学生たちの言動で注意を喚起されたのは、葛藤を終了させ、ジェンダーをさらにより強力に内面化する契機として、親密な存在が大きな影響力を持っているらしいことであった。その存在は、大きくは２つ。一つは母親であり、もう一つは親密な異性（いわゆる“カレシ”）である。

このうち、母親の影響力は強力であるが、本稿では男性の権力に焦点を当てることと紙幅の関係から、この論点については稿を改めて論じたい。ここでは“カレシ”を中心とした、男性との親密性について、これ以後の議論にかかわる最低限のロジックを簡潔にまとめたい[5]。

小倉千加子は、ジェンダー・カテゴリーにおける女性の特徴を７つに分類する中で、自立願望の抑制からもたらされる自己不全感、養育欲求を挫かれた結果としての自身の欲求への確信の低さと自己主張の困難さ、男性に比べて自己肯定感・自尊感情が低い、ことを挙げている（小倉，2001：23）。

このような自己不全感・未達成感は、産業社会の構造によっても増幅されると思われる。産業社会で非主流化される女性は、交換可能な流動的労働力となりやすく、交換不可能な存在（かけがえのない存在）という実感を男性に比べて持ちにく

い。産業社会での交換不可能性（社会的承認）をあきらめた女性は、特定の男性にとって交換不可能な存在になろうと戦略を変えことがある。

一方で、男性たちはセジウィクが「ホモソーシャル」という概念で指摘したように、男性間での性関係の可能性を排除することにより社会的関係を安定させ、そのために女性を排除し外部化し、性的対象としてきた（Sedgwick，1985＝2001）。男性間では女性を性的対象とする者であることを相互に表明しあうことが、男性間の社会的関係を安定化させるために必要とされ（＝ホモ・フォビア＝同性愛嫌悪）、同時にマスキュリニティ（とこの構造から排除された女性へのミソジニー＝女性嫌悪）が発達し、あたかも戦利品のように女性の獲得競争が繰り広げられる。その際に男性間に共有される女性に対する評価基準を「美」と呼び、「美」とは、男性間に共有される“戦利品”の序列価値の別名でもあった。

> 聞くところによれば生前、マリリン・モンローは身近にいる誰かに絶えず「キミはきれいだ」と言い続けていてもらわないと自分が存在していないような不安感にさいなまれたという。身近にいる誰か、とはむろん男である。―（中略）―女の生きがいとは男に向けて尻尾をふっていく中にあるという訳なのだ。この尻尾のふり方の違いが厚化粧から素顔までの、さまざまなメスぶりとなってあらわれるのだが、しかし、所詮他人の目の中に見出そうとする自分とは、＜どこにもいない女＞であって、その＜どこにもいない女＞をあてにして、生ま身の＜ここにいる女＞の生きがいにしようとすれば、不安と焦燥の中で切り裂かれていくは必然なのだ。
>
> 媚びるとは他人の価値観の中に己を売り渡すことであり、メスとして尻尾をふって生きる女の、その媚の生が、絶えまない存在の喪失感に脅かされるのはそれ故だ。
>
> 「キミはきれいだ」の麻薬が切れれば、すぐさま自分が生きているのか死んでるのかわからなくなるという禁断症状こそ、女の顔を絶えず男の方に向けさせる元凶なのだ。（田中，2004：16）

社会的な交換不可能性（社会的承認）から疎外された女性たちのなかには、特定の男性にとっての交換不可能な存在になろうという戦略を採用する者もでてくる。しかし、ホモソーシャルな関係からは外部化され、性的存在化されている女性は、性的な回路による承認が自身の存在価値を直接意味づけるものと誤解しやすくなる。性的な承認とは、たとえば性的な快楽を得る／与えるといったような問題ではなく、社会的承認から疎外された存在が、承認を与える権力を持った存在によって、唯一の交換不可能な存在として認められるという事態である。わかりやすくいえば、誰か（男）の“only one”、“best one”になるという事態である。そしてホモソーシャルな構造下では、それは性的な回路を通じて発現しやすいのである。

そのような場合、性的な関係性は女性たちにとって極めて重要なものとなり、自身の性的魅力とそれを支える「美」は一大関心事となる。かつて雑談の中で「サークルの男たちはバカだと思うけど、それでもムハーッ！とされないのかと思うと悲しくなる」と発言した学生がいた。頭では男性たちの身勝手さや思考能力の低さを適切に評価しつつも、自分自身の存在基盤としてそのような男性たちの性的な視線を必要としてしまう矛盾に満ちた状態。この“ムハーッ！問題”は、ここに引用した田中美津の文章で指摘されている＜ここにいる女＞と＜どこにもいない女＞の間の葛藤そのものである。

しかもこのような性的承認は、権力を表現する用語としての≪ファルス≫と表裏一体の関係にある。ここでいう≪ファルス≫は、象徴的ファルス＝男性の権力が指し示す“父の法”の具現化されたもののことであり、ある身体器官（ペニス）を幻想によって書き換えたものという意味である。ここで重要なのは、≪ファルス≫は身体器官であるペニスそのものではなく、ペニスそのものと混同されやすい（＝誤読されやすい）権力作用であ

る点である。そのため、≪ファルス≫がペニスと誤読されやすい条件で女性が承認を求めると、承認と性的承認は同義となりやすく、実際にそれは性的な回路を通じて表現されることがほとんどである（ホモソーシャルな条件下では）。その帰結として、女性は美を磨き、それでも男性の性的欲求を十分に惹起できないと思われる場合には、男性をなぐさめ、おだて、自尊心をくすぐり、無償労働を提供するという代替手段を尽くすことになる。それは産業社会（的世界観）での交換不可能性を体験したことのない女性たちが、「交換不可能な存在」になる方法に確信が持てないために、社会に流通している性差コード（＝ジェンダー）を内面化し、「尽くす女」に自らを仕立て上げてゆく「生－権力」の実践過程でもある。

一方で男性側から見た場合、これほど都合のよい構造もないだろう。男性は、性愛を発動するだけで、女性から献身、労働力、尊敬、自尊心の充足、といったありとあらゆる利益を享受できる、という仕組みが出来上がるからだ。このような男性が発動する性愛と、それを獲得しようと企図する女性たちが性愛以外のすべての愛と無償労働を交換する領域が親密性を通じて表現される親密圏である。「男にとって女の最大の役割は、自尊心のお守り役である」と喝破したのは上野千鶴子だが（上野，2010：64）、男性たちは、そのホモソーシャルな関係への参加資格の確認として、女性を性的回路を通じて利用し、プライドを保ってくれる女性がいないと、まともな社会生活を送れないほどまでに堕落し、愚鈍な存在となった。そして彼の愚鈍さが彼自身の権力を支えることになる。それはいうまでもなく、その方法が安易で楽だからである[6]。

そしてこのような親密性の構造は、女性にもミソジニーを植え付けることを促進する。女性にとってのミソジニーとはすなわち自己嫌悪のことであり（上野，2010：８）、自らを男性と比較して何かしら価値の低いものと感ずる感性でもある。これはすでに拙稿（池田，2006：47）においても紹介した事例だが、私の勤務校の学生の中で、有名私立大学に通う“カレシ”の課題を手伝っていて、同日が期限だった自分の課題を提出できなかったといったようなケースは、けっして珍しいものではない。このようなケースからわかることは２つある。１つは、彼女らは「自分（女性）が何かを学び達成すること」よりも、「“カレシ”（男性）が何かを達成すること」の方に意義があると思っていること。もう１つは、「自分が何かを達成すること」よりも、「“カレシ”が何かを達成することを手伝うこと」の方により意義があると考えている、という二重のミソジニーが内面化されていることである[7]。このように、女性に埋め込まれた未達成感は、性的承認という回路を経て男性と「性愛と＜愛＝無償労働＞との交換」を親密性の圏内において惹き起こし、その交換はホモソーシャルな権力を強化し、さらに女性自身にミソジニー（自己嫌悪、自己の価値のディスカウント）をうみだし、そのことがさらに男性の支配を容易にする。田中が指摘した「「キミはきれいだ」の麻薬」とは、この構造と女性自身のミソジニーの表象なのである。

３．契機と想像力ー劣等コンプレックスと学習性無力感

さて、ここまでの親密性と承認とミソジニーの関係を念頭に置き、再びジェンダー論やフェミニズムに出会った女性たちの選択の問題を考えたい。先に鈴木淑美が指摘したように、大学に通っているにもかかわらず、変化を拒絶し、自身の変化に冷淡な学生たち（不変モデル）。あるいは私が普段接している学生の中に散見される、葛藤の末に変化を怖がり、あきらめる学生たち（葛藤モデル）。これらの諸相は、論理的な問題としては、学生時代に留まる問題ではなく、女性の生活全体に一般化して考えるべき問題でもあろう。

なお、誤解を避けるために記せば、私は、学生たち（女性たち）がジェンダー論やフェミニズムといった自らの存在を問う言説と出会ったとき、すべからくただちに変化すべきであると考えているわけではない。実際のところ、変化する学生は、自らの力で変化を遂げるのである。逆に、い

くら首に縄を付けて水飲み場まで連れてゆき、コップに水を汲んで口元まで持っていっても、飲む気がない限り、決して飲むことはない。このことは、女子大学での教育経験のなかで何度も思い知らされてきたことである。教員にも学問にもそのような力はない。安易な運命論は退けられるべきだが、経験から感じることは、変わる学生は、なにかしら変わる必然性を内包しているのかもしれず、そもそもそれは彼女ら自身の人生の選択の問題でもあるからだ。

> なぜ、結婚する前の、就職する前の大学生、あるいは高校生の、今このイデオロギーを知っておいたらこれからいちばん役に立つ、そのまさに該当する年齢の人たちがフェミニズムに耳を貸さず、そして年とった四十代、五十代の有閑専業主婦で、今から学んだって人生変えようのない人が学び（笑）ね。（上野・小倉，2002：67）

小倉千加子は、上野千鶴子との対談の中で、このように、フェミニズムに背を向ける若い女子学生と、一方で様々な人生経験の末にフェミニズムにたどり着く年配主婦という、フェミニズムが論理的に最も必要とされる年代と、実際にそれを需要する年代のミスマッチングについて嘆いていた。女子大学の学生の中に、「耳を貸さ」ない学生がいることは、実体験としてよく知っている。女子大学で教えて10年と少しの私には、長い年月の末にジェンダー論に回帰してきた元学生を知る経験はない。しかし子育てが終わった世代の女性たちの中に、切実にジェンダー論やフェミニズムに対する渇望が存在していることは、同僚教員からの話や、地域連携活動の中で見聞きはしている。小倉の指摘はこのことだったか、と上記の引用箇所を思い起こしたことも何度かある。

このような文脈で捉えたとき、一見＜不変モデル＞であった女性が年を経て、フェミニズムに回帰するというストーリーも連想可能であろう。しかし、話はそう単純でもない（ちなみに小倉もそう単純なものとしては発言していない）。たとえば、＜不変モデル＞という契機、「耳を貸さない」という状態においても、本当に自己の変化がもたらす可能性に気づいていないのかといえば、気づいていない部分と、気づいてしまえば変わらざるをえず、そのことに対する恐怖や計算が働いた末の、「ジェンダー論やフェミニズムには近寄らない」という選択が存在しているかもしれないからだ。くどいようだが、本稿では個々の女性を類型に当てはめるのではなく、その中にある論理的なモデルを探ることが目的であり、ある状態がつねに不変であるかどうかが問題なのではなく、そのような契機が存在することが焦点と考える。したがってこれ以後の議論はモデルに対する考察として考えたい。

そのことを確認したうえで、最初に自己変化の可能性そのものを考えられない、意識しない／できない契機について考える。いわば「認識できない“変化への契機”」である。その筆頭として検討されるべきは、劣等コンプレックスである。劣等コンプレックスという概念は、いうまでもなく精神分析の概念として発生し、後にフランツ・ファノンが社会文化的な文脈で再解釈し、その後ポストコロニアリズムの重要な概念のひとつとなっている。自身も精神科医であったファノンが強調したのは、劣等コンプレックスは優越感を得ようとする他者によって植えつけられるものである、という点であった。ファノンは、植民地支配に先立って民族ごとに劣等感が存在していたと考えるマノニによる一種の本質主義的劣等コンプレックス観を批判し、「劣等意識を抱くことは、欧州人が優越意識を抱くことの土着的相関物である。劣等コンプレックス症を作るのは、人種差別主義者である」と指摘した（Fanon, 1952＝1998：150、傍点原文）。

男性により自己嫌悪としてのミソジニーを植え付けられた女性は、男性に比べてなにかしら自分は価値の低い存在であり、自分の行うこと、達成することも、男性が行うそれよりも、価値の低いものであると思いがちであることは、ここまでにも論じてきた。それは裏を返せば、男性がホモソーシャルな権力基盤を維持するために女性を他

者化し、価値の低い存在として利用し、彼自身の優越感と自尊心の源として活用してきたからである。この点で、ファノンが指摘した状況と、現在の男女の状況は、支配構造としては同一である。このようなミソジニーの感覚は、まさにそれが構造的産物であるがゆえに、男性の支配権力を支えることに貢献する。ホモソーシャルな男性共同体という社会的な構造の結果としてミソジニーが生産されているのだから、このようなミソジニーと劣等コンプレックスは、程度の差こそあれ、論理的にもすべての女性に共有されていると考えられるからである。

またファノンは「マルチニック島人は自分を白人と比較するのではない。白人は父、首長、神と見なされている。マルチニック人は自分を白人の守護の下に同胞と比較するのだ」と論じる（Fanon，1952＝1998：233）。劣等コンプレックスを内面化した結果、多くの女性は男性を神として見ざるをえなくなる。彼女らが“劣等”なのは、生まれながらの原罪であり、その原罪ゆえに神である男性に裁かれる。その裁きの基準は「美」であり、裁きの場は「ベッドの中」である。そしてそれらはすべて、疑問をはさむ余地のない、当然のこととして（おそらく無意識的に）内面化される。そして、神である男性に対して挑戦したり、比較して考えるのではなく、男性の守護（＝選ばれること）をめぐって女性同士が競合関係に入ることになる。その裁きの基準はホモソーシャルな男性権力が女性に命令する「美」なのであるから、当然ながら女性同士の競争も「美」をめぐる領域に重心が存在することになる。このようにして、女性の、自分以外の全女性に対する、抽象的・潜在的ともいえる「美をめぐる競争」が発生し、その結果、女性同士はさらに分断される。

> 劣等コンプレックスは、被植民者の精神に無力感という感情を発生させることによって、自立を想像する力さえも奪いとってしまうのだ。自立できなければ、助けてくれる者に依存するほかないだろう。そして、助けてもらいたければ、従順になるしかないだろう。なぜなら、従順でなければ助けてもらえなくなるかもしれないのだから。被植民者は、こうして、すすんで従順な身体と化していくのだ。また、助けてもらえればありがたいだろうが、その一方で、もしも助けてもらえなかったらという不安もつきまとう。その結果、被植民者は、植民者を畏怖すると同時にありがたがる感覚をうえつけられるのだ。（野村，2005：89）

日本人によって沖縄人に植え付けられた劣等コンプレックスについて述べられたこの野村浩也の文章は、そのまま女性の男性に対する劣等コンプレックスの記述としても転換可能なものである。社会構造的に男性の約半分の所得、結婚し家事と育児を行うことへの社会的圧力、そしてそれらは男性に比べて価値生産労働よりも感情労働に向いている女性の本能の帰結であるとする数々の本質主義的言説。それらの相乗効果により、女性は男性に比べて、どこか価値の欠落した存在で、男性の助けがなければ生きていけない存在なのではないか、というミソジニーが、彼女ら自身にも埋め込まれる。それは「助けてもらうこと」への渇望と、それを得られない可能性への恐怖をうみだし、さらに男性に対して依存的で、その感覚がさらに無力感を増大させる。

このような状況は、女性にとって、自身の変化に対する期待値を下げ、自身の変化によってよりよい人生が獲得できるのではないかという想像力に対する確信を、確実に下げる。一方で、男性からみれば、男女の違い（その多くは生物学的“本質”に還元される）を強調し、男性の方が多くの社会的局面で優れていると強調することによって、女性に劣等コンプレックスを植え付けることが可能である。そうして女性が劣等コンプレックスを内面化すればするほど、女性同士は「美」をめぐって互いに争い、相互理解や連帯から遠のき、彼女らの非難の矛先は女性同士の戦いに転化させられ、男性たちの利益は盤石なものとなる。

一方で、このようにして熟成される無力感につ

いても言及しておく必要があるだろう。劣等コンプレックスと無力感は、野村も指摘しているように被抑圧者（女性）から想像力を奪う“両輪”であるからだ。この論点を考えるときに、大きな示唆を与えてくれるのは学習性無力感という概念である。学習性無力感は、心理学者マーティン・セリグマンらが提唱した社会学習理論で、強い否定的ストレスが回避できないと思った時、その状況から逃れようと思うことすら、思いつかなくなるというものである。それは有名な犬実験を通じて提唱された。レノア・ウォーカーの筆による実験の概要を引用する[8]。

> セリーマン（※セリグマン：引用者注）と研究者たちは犬を檻に入れ、散発的に電気ショックを与えた。犬たちはすぐに、どんな反応をしてもショックを制御できないことを学習した。最初犬たちはいろいろな自発的反応をして、どうにか逃げようとしたが、どんな反応もショックを止めることができなかった時、それ以上の自発行為を止め、服従的になり、受け身で、従順になった。そして研究者たちがやり方を変えて、犬たちに檻の片側から逃げられることを教えても、犬たちはまったく反応しなかった。実際ドアを開け放して逃げ道を見せても、彼らは受け身のままで檻から離れようとせず、ショックを避けもしなかった。もう一度自発的反応ができるようになるまでには、何度も犬たちを出口まで引きずり出してやらなければならなかった。このような実験では、犬たちが幼ければ幼いほど、いわゆる学習された無力感の影響が長引いた。しかし、いったん自発行動がとれると分かると無力感は消失した。（Walker, 1979＝1997：53－54）

学習性無力感という概念からは、圧倒的に否定的で不快なストレスが加えられる状況が続くと、自ら積極的に抜け出そうとする努力をしなくなることがあり、少しばかりの努力（自発的行動）をとれば、その状況から抜け出すのに成功する可能性があったとしても、努力すれば成功するかもしれないということすら考えられなくなる、という事態が示唆されている。ストレス源に対してなにも出来ない、なにも功を奏しないという状況がもたらす無力感である。学習性無力感という概念は、第一義的に実験心理学の概念であるが、ここで実験内容の概要を引用したウォーカーらによって、DV（ドメスティック・バイオレンス）被害者が、なぜその状況から抜け出せないのかを説明するロジックとしても用いられてきた。

セリグマン本人をも含むピーターソンらによれば、学習性無力感という概念は、その本来の範疇を超えて、拡大解釈されて使用され、なかには全く該当しないものも含めて、多様な文脈で使用されてきたという（Peterson, et.al, 1993＝2000：7－11）。しかし、この概念を人間に適用することは、かなりの部分で可能であり、社会問題に適用することも（決定的な実証とはなりえていないものの）類推的に可能であるという（Peterson, et.al, 1993＝2000：147；281）。なお、学習性無力感の概念を適用するためには、3つの基準があるという。1つめは、不適切な受動性の存在（不適応的受動性）。すなわち能動的な行動が状況を変えるにもかかわらず、それを行えずに不適切な受動性を示し続けていること。2つめは、コントロール不可能な経験。経験という点に注意が必要である。学習性無力感はコントロール不可能な経験の後に、その繰り返しと認知される状態で発生するものであり、その時点で現実にコントロールが可能か不可能かという客観的な視点ではなく、本人が不可能と認知していることが重要であるという。3つ目は、無力感認知（媒介認知）。学習性無力感は、コントロールできない出来事にさらされている間に獲得された特定の認知により媒介され、それが新たな状況に遭遇した時に不適切に一般化するものであるという（以上、Peterson, et.al, 1993＝2000：245－246）。

本来の意味での学習性無力感は、このようにそれが適用される条件が明確であり、実際、ピーターソンらの著作においても細かな事例が検討され、どのようなケースが学習性無力感に当てはま

るのか（あるいは当てはまらないのか）が検討され、ケースの峻別が行われている。その意味では、同一の社会問題に対する反応であっても、それに直面する個人によって相当するケースと相当しないケースが起こりうる。

そのことを肝に銘じつつ、考察を進めよう。ここで問題としているのは、ジェンダー論やフェミニズムに触れた女性たちが、その思考や態度を変化させる可能性についてである。当然ながら、すべての女性に対して学習性無力感の概念を適用することはできない。しかし、一部のケースにおいてはそれが成り立ちうるだろう。最初に検討したいのはコントロール不可能な経験である。どの時点かという時期、またその程度も様々だろうが、多くの女性にとって、女性であることを理由に耐えがたい苦痛を経験すること自体は一般的な状況であると思われる。親や近親者からの性的虐待や性暴力被害といった強烈な体験から、家事の強要、女性であることによる低評価、等々、様々な契機が考えられる。またたとえば、一般に女性は男性に比べて占いに走る傾向があるといわれるが、これもこのような契機と密接な関連をもっていると類推可能である。自分の生活や人生に大きな影響を与える変化があり、しかもそれがどのように変化するのかに対して、事実上自分自身が関与する力をほとんど持っていないと自覚しているならば、興味関心の対象は、その状況への関与や対策を立てることではなく、その過程をすべて取り払った結果のみということになる。それを仮想的に教えてくれるものとして、占いは存在している。

このコントロール不可能な経験という傾向は、とくに実際に種々の出来事に対するコントロールが不可能な子供時代に、家父長制的価値観の強い家庭、あるいは地域、あるいは教育環境（学校の校風）等において育つことによって助長されるだろうし、また同様の経験を積んできたピア集団（近接的同質集団）も形成されやすいだろう（具体的にはウマの合う仲の良い友達）。それらの相乗効果によって、確信は深められやすいといえる。その意味では、多くの女性にとって、コントロール不可能な経験は、男性以上に経験されやすい状況にあるといえる。

つぎに、無力感認知（媒介認知）。それまでの生育過程で獲得した無力感が、異なる状況においてもその繰り返しとして認知されることが、学習性無力感の３つの基準のうちの１つであった。今まで、「どうせ私なんか」、「今までうまくいったことがない」、「もう遅すぎる」といった言葉が学生の口からしばしば洩れるのを聞いてきた。自尊感情の低さとミソジニーの内面化という、本稿でも焦点として論じてきた性向である。そのような人生や自分に対する基本認識のバイアスが存在する中で、新たな否定的・抑圧的経験に出会ったとき、その事態に対して能動性を発揮して事態を好転させるという動機がどの程度現実に存在しうるのかを考えれば、学習性無力感に該当するケースが多く存在している可能性は否定できない。

さいごに、不適切な受動性の存在（不適応的受動性）。これはむしろ、コントロール不可能な経験と無力感認知の帰結として捉えた方が、論理的には整合性が得られるだろう。女性は男性に比べてコントロール不可能な経験を積みやすいという社会状況、また自尊感情が低くミソジニーが内面化された状態での無力感認知、それらの結果として、能動的な行動が状況を変革する可能性があるにもかかわらず、そのことを認知できずに不適切に不当な扱いや状況に甘んじてしまう。そのような受動性を発揮してしまう可能性は、これらの条件が揃えば起こりうるだろう。そしてそのような諸条件は女性の場合、きわめて頻繁に起こりうることでもあるのだ。

そして、このような学習性無力感の適用条件を考えるとき、気づかされるのは、女性が学習性無力感を獲得する際には、情報経路の問題が関わっている可能性である。コントロール不可能な経験についてであるが、それはそもそも、どの程度のコントロールが及ぶ問題なのか、その問題がどのような構造によってもたらされているのか、という社会的な情報と深く関連した問題であるといえる。また無力感認知は、社会的学習過程そのものにかんする部分であり、一つの情報（方法）しか

与えられなければ、その繰り返しの中で、学習した結果として無力感は強化されるだろうし、他の情報、コントロール不可能と思っていた事態がコントロール可能なものであった、あるいは可能なものになりつつある、といった情報が与えられれば、その学習の在りようも変化するはずである。そしてその帰結としての、不適応的受動性が獲得される契機も減少するはずである。

このように考えてみると、ジェンダー論やフェミニズムといった、女性をエンパワーメントしようとする言説に接し、かつそれに反応しない、という状態は、学習性無力感の現れとして理解することも論理的には可能である（現実には個々のケースによって適用条件が異なることはすでに確認した）。そうであるならば、学習性無力感の克服方法が、このような構造にも応用可能となる可能性が開ける。一方で、男性の側からすると、学習性無力感を女性に獲得させることは、女性に不当な損害を与え続けることを可能とし、同時に男性に不当な利益をもたらし続けることも可能にするものである。その場合、女性を多様な情報経路から排除することが支配のためには最も効率の良い方法となる。知らせないこと、知る機会を奪うことが肝要である。無力感を修正し、克服可能とするような多様な情報は、男性の利益にとっては有害である。女性は男性に対して、従順で従属的であり、それはいかなる方法や言説をもってしても覆すことができない、女性にとってコントロール不可能な問題であり、しかもそれは繰り返し女性の身の上に起こることである、というメッセージをホモソーシャルな社会が発信し続けること、それが男性の不当な利益を守り、女性の不当な損害を顕在化させないための、最良（女性にとっては最悪）の方法となる。

劣等コンプレックスと学習性無力感は、ともに女性に対して想像力を奪い、思考することの不毛さを実感させ、考えることに対する消耗感を起こさせるものである。その結果、これらのロジックに捉われてしまった女性たちは、現状が当たり前であり、男性（とホモソーシャルな権力）に対して奉仕・貢献することに疑問を感じなくなる。

そのように「自分が変化できない」という実感・確信を持つとき、彼女らは、「変化しない状態」を肯定的な状態、他者からの強制ではなく自ら選び取った状態、あきらめの結果ではなく自らが望んだ状態、と思い込むためのロジックを、自分自身のために準備することになってしまうだろう。自分は犠牲者ではなく、能動的に現状を選び取った主体的な存在なのだ。犠牲者として日々を過ごすことは感情においてさらなる消耗をもたらすが、主体的な選択の結果、望んだ結果と信じられるならば、日々の生活においてみじめな思いはしなくて済むからだ。自分は変われないのではなく、変わらないことがよいのだ、というロジックが盛大に内面化されるだろう。

一方で男性たちは、その利益維持のためには、女性たちを多様な情報、価値観から疎外することが最も効果的であるということになる。

4．ジェンダー論とリスク

ここで情報経路と情報の多様性が問題として浮かび上がってきた。このことを考える際に、思い出す言葉がある。それはリスクという言葉である。たとえば、ジェンダー論やフェミニズムに触れて、葛藤を抱え込む＜葛藤モデル＞に当てはまっていると推定可能な学生の口からは、「変わることはリスクが高い」、「変わることのリスクがわからないから、踏み出せない」といった発言（やレポートの記述）がしばしば見受けられる。

ここで話を進める前に、リスクという概念について確認をしておきたい。美馬達哉はリスクを特徴づける３つのテーゼとして、⑴何物もそれ自身ではリスクではないが、どんなできごとと接合されるかによって何ものもリスクとなりうる、⑵リスクは計算可能である、⑶個人的リスクは存在しない、と述べている（美馬，2012：121－125）。リスクは、それが起きる確率が計算可能なものであるが、それによってもたらされる結果の予測は難しく、またリスクは計算可能な概念であるがゆえに集合的なものである、ということだ。ちなみに、それが発生する確率がわからないものは“不

確実性”として、概念上はリスクから分離される。また、リスクそのものは集合的であっても、ある特徴を基盤に社会集団のカテゴリー化（リスク集団化）が行われ、リスクの差異化・個別化を通じて政治的介入権力のきっかけともなりうる（美馬，2012：125）。

このようにみれば、リスクという概念は、元来はたとえば自然災害や病気といった、その発生に対しては社会的操作の及ばない領域、準自然的な事象に用いられる概念である。しかし「社会的リスク」という用語が存在するように、現実社会ではその意味は拡大されて使用されることも少なくない。

さて以上のことを踏まえて考えてみたい。そもそも、＜葛藤モデル＞の学生たちがいう、ジェンダー論やフェミニズムを内面化し、自身が変化することによって発生するリスクとは、いったいどのようなものであろうか。彼女らの言説を要約すると、リスクによってもたらされる、恐怖すべき結果は大きくは２つである。１つめは、男性にモテなくなること。または男性による承認を必要としない意識を獲得し自立を目指すが、それらの企てが失敗し、結果として貧困に陥るのではないかという不安（飢餓リスク）。２つめは男性にモテなくなること。または男性による承認を必要としない意識を獲得することにより、家族を持つことなく、結果として孤独に死んでゆくのではないかという不安（孤独リスク）である。

小倉―やっぱり聞きに来る専業主婦の人は問題意識があって来てるんだけれども、そこでフェミニズムを勉強して、自分の思想に合わせて生活を変えられるかというと、変えられない。で、思想と生活の間に矛盾を抱えて生きていくのは三年間が限界ですね。耐えられるのは三年間。

上野―経験的にね。

小倉―うん、経験的に。なかには生き方を変えていった人もいるよ。

―（中略）―

上野―女性で生き方を変えた人は？

小倉―いますよ、たくさん。別居はしましたね。離婚した人もいる。でもその人たち、今、どちらかというと、例外なく生活苦にあえいでいる。フェミニズムというのは、専業主婦を離婚させて生活苦にあえがせる思想なんだろうか、という自問自答を私はずっとしたよね。

（上野・小倉，2002：112）

小倉千加子は上野千鶴子との対談の中で、講演会や主婦も交えた勉強会等の経験を振り返り上記のように発言している。ちなみに、３年耐えられればたいしたものだというのが、私の最初の読後感であった。私が普段接している学生たちは、その葛藤に対しておそらく１年ももたないと思われる。性活動期に入り、男性からの性的アプローチも多く、問題意識を持続させにくい環境であることを差し引いてでもある。この対談でも紹介されているように、実際に、“飢餓リスク”（飢餓は大げさにしても）は存在しており、それは一定の確率で現実に起こりうる。実際にどの程度の確率であるかは客観的に示される必要もなく、彼女ら自身にそれは一定の確率で起こることと認識されれば、それはリスクの条件を満たすといえるだろう（リスクテーゼの⑵を満たす）。「現実問題として重要な意思決定に関わるリスクについては、リスク（狭義）と不確実性は客観的な違いではなく、その現象をどういう立場から見るかという視点のとり方の違いに関わっていると考えた方が実態に近い」からである（美馬，2012：90）。しかも、ジェンダー論やフェミニズムの思想を内面化することが、離婚等の「単身者である／になる」という事象と接合されたとき、それは飢餓（生活苦）というリスクに転化するのであれば、ここでもリスクのテーゼ⑴を満たすことになる。そして、その際にカテゴリー化されるリスク集団は「単身者」、「未婚者・非婚者」、「離婚経験者」といったものであり、それらは集合的なリスクとして認識可能であり、これもまたリスクのテーゼ⑶を満た

している。このように考えれば、＜葛藤モデル＞の学生たちがいうリスクとは、本来の意味での、正統なリスクであることがわかるだろう。

この“飢餓リスク”を避ける方法は皆無ではない。世の中には男性の経済力に依存しなくとも生活している女性は存在する。しかし、私が普段接している学生たちの身近な存在としてはきわめて稀である。彼女らには、当然ながら親がいる。その多くは婚姻形態を維持していて、母親が専業主婦という学生も多い。母親が自活しているのは夫と死別か離婚したケースということになるが、その多くは母親が経済的に苦労してきた姿を身近に目撃して育っている。夫と離れ、かつ経済的に充足した母親はきわめて稀である。これらの状況を総合的に考えるならば、多くの女性にとって男性の経済力から離れて自立した生活を送ることは想像しにくい事態であり、男性に依存することはコントロール不可能な経験として認知されている可能性がある。もちろん、彼女らの母親がそうであったからといって、彼女らが男性に経済的に依存して生きるほかに道がないということは、まったくない。その方法は本稿の趣旨から外れるので稿を改めて論じるが、問題は、その方法に対する情報が欠如している点である。またしても情報経路の問題が顔を出す。

一方で“孤独リスク”についてはどうだろうか。このリスク認識においては、より情報経路の欠落が問題となっているように思われる。孤独な老人は確かに存在するし、自立志向が非婚化と接合されリスクとして認識されること、非婚者というリスク集団が設定されていることから、リスクとしての３つのテーゼを満たすことは“飢餓リスク”の場合と同様である。しかし現実の認識においては、“孤独リスク”の方がより情報から疎外された結果であると感じられる。実際のところ、婚姻関係を結んでも子供が産まれるとは限らないし、子供は婚姻関係が絶対条件となって産まれてくるものでもない。婚姻に拠らない新たな家族の形も、様々に模索されている。さらには、上野千鶴子による「おひとりさまの老後」という言葉が流行語になったように、婚姻も家族の存在も老後の孤独を埋め合わせるという保障はない。ようするに、リスク評価を行う際の基礎情報が、婚姻を基盤とした家族モデルに偏向しているのである。

また、“飢餓リスク”が現実の経済的構造と直接的に結びついた問題であるのに対し、“孤独リスク”は家族制度という社会構造と対人コミュニケーションとに直接かかわる問題で、ある意味では学生たちとっても“飢餓リスク”と比べて操作可能性、関与可能性の余地が大きい領域である。にもかかわらず、“飢餓リスク”以上に切実なリスクとして多くの学生には感知されているように思われる。これはまったくの印象論に過ぎないが、彼女らの言動、あるいは授業レポートでの記述においても、頻度、切実さ、ともに“孤独リスク”への不安は非常に大きい。このことは印象論ではあるけれども（レポートの記述頻度をカウントしたわけでもないので)、そこには単に印象論では片づけられない論理的な焦点も含まれている。

５．リスク、真正性、跳躍

この女性の孤独への不安を心理学の立場から論じたのがジーン・ベーカー・ミラーである。以下、ミラーの議論をトレースしつつこの論点を整理してみよう。ミラーは、男性は進歩・発達、女性は関係性を重視する文化的規範の下で生きるため、女性は孤立を最も恐れるようになると指摘し、孤立を恐れるがゆえに、女性にとっては、自身の欲求を確認することよりも、他者の欲求を内面化する方が楽になってしまうという。一方で女性は、葛藤とは、なにか恐ろしいことだと教えられる。なぜなら支配者にとって、被支配者の葛藤は状況を変化させかねない脅威と映り、避けるべきもの、忌むべきものであるからで、被支配者はその支配者の価値観を植え付けられ、受容させられるという（Miller，1986＝1989：62；138；237；245)。

また一般に、葛藤を抱えたとき、怒り、反感、憎しみ、といった感情が湧くものだが、それらは社会通念上“ネガティヴ”なものとして否定的な

イメージを与えられている。それと同時に女性の多くは、自分の感情に真正性（authenticity）があるとは思っていないので、そのような感情を抱く自分の方が間違っていると感じ、逆に自分自身への批判を強めてしまう。その結果、自分のために「真正な力を行使すること」は、他者を傷つけること、他者から何かを奪うことだと認識してしまいがちになる（Miller, 1986＝1989：211；229）。これらのミラーの指摘を要約すると、多くの女性は、関係性を中心に生きることを強いられがちなので、変化（とくに自己決定が惹き起こす）を恐れる傾向がある、ということになるだろう。

他方ミラーは、女性の怒りが他者（とくに男性）を不快にさせ、自分が捨てられるのではないかという危険（これはリスクと言い換えが可能であろう）を想起させ、その孤立への恐怖感が真正な怒りの表出を阻害すると指摘する。多くの女性が自身の“力”を恐れるのは、それが男性たちの拒絶反応を引き出すからということでもある（Miller, 1986＝1989：213；228）。しかしここまで本稿において考えたように、実際のところ、男性たちが女性たちの“力”を拒絶するのは、それがまさに“真正（authentic）”なものであり、男性の“不正（unfairness）”に対して、修正を迫るものであるからに他ならない。しかし、その構造が隠蔽されているがゆえに、孤立を恐れる女性は自己の成長に確信が持てず、むしろ恐怖を覚えてしまうと考えられる。ミラーは、それらの結果、多くの女性たちは、自分の能力を抑え込み他者に隷属することに多大なエネルギーを使うことになる、と指摘する。しかしこのように考えてくると、女性にとって必要な“力”とは、他者を支配するようなタイプの力ではなく、「自己実現能力」を指すものであることがわかる（Miller, 1986＝1989：185；211）。考えてみれば、怒るためには、多少なりとも自分に“力”があると感じていることが必要である。徹底的に支配されている場合、怒りすら湧かないのだから。

ミラーの葛藤と真正性にかんする議論、ならびに学習性無力感を背景とした分析を社会学的に再解釈する一つの方法は、リスクという概念を用いることである（もちろん他の方法も存在するが）。この点を学生たちの言葉が正確に射抜いていたことは、驚きに値する。そしてそのリスクの認知とそれを惹き起こす背後のバイアスを結び付ける諸論点は、ポストコロニアリズム論の語法によってその輪郭を探ることができる。

美馬達哉は、ジグムント・バウマンの近代流動性の議論を批判的に検討する中で、グローバル化が進む現代のリスクについて、アッパークラスの操作可能性に基づいた「確実性」、アンダークラスの「危険な階級」への移行を国家が介入的に予防しようとする「安全保障」、ミドルクラスの自己と環境との関係として個人責任でマネジメントを行うべき「安心」と認識されると、３つの相に分けて議論を展開している（美馬，2012：112－113）。同時に美馬は2011年の福島第一原発事故によって浮き彫りになった地域格差に触れつつ、現代社会のリスクはグローバルであると同時に、経済的な階級の線に沿って不均等に分布していると指摘する（美馬，2012：220）。

これらの美馬の議論は非常に示唆的である。なぜなら、「1.」において論じたように、少なくとも日本において、女性はある種の階層性を有した集団であり、そこで実際に直面するリスク、あるいは認知されるリスクも、（女性内部の階層性も含めて）不均等なものであることが推測されるからである。そして国家によっても、また女性たち自身によっても「危険な階級」として未婚者・非婚者が捉えられており、それは飢餓、孤独という、不明瞭ではあるが個人に還元可能な（個人として経験する）集団的リスクとして認識されているからである。その結果、大学に進学可能な女性たち（私が日頃接している存在である）は、リスク・マネジメントの対象として婚姻や家族を捉えており、そのマネジメントとの関係性のなかで（表裏一体の関係にある関数として）ジェンダー論やフェミニズムがもたらす新たな価値観や行動原理を受容している可能性があるからだ。そのように考えれば、経済的なリスク（飢餓リスク）と、その経済的階層の表象でもあり、同時に経済

的指標のみでは計測できない人生の充実度へのリスク（孤独リスク）の２種のリスクが、不可分のものとして、接合されて認識されている状況も理解可能である。

女性たちの学習性無力感におけるコントロール不可能な経験がもたらす不適応な受動性は、リスク評価の誤謬と捉えることも可能であり、その背景には基本的な思考のバイアスとして女性たちに自尊感情の低さやミソジニーとして埋め込まれた劣等コンプレックスが存在している。それらの構造は、ホモソーシャルな権力によって情報経路が制限されることによって維持可能となる。その結果、自立につながる変化やロジックはむしろリスクとして認識され、跳躍は妨げられる。

同時に、リスクの評価はつねに文化的なものである。リスクは文化的には否定的なものと捉えられ、それゆえにリスクに対する対応策の価値評価はリスクの客観的評価とは必ずしも一致しない（美馬，2012：36）。とくにそのリスクにまつわる諸側面が、社会の支配的価値観から逸脱している場合、その否定的傾向はより強くなる。

> 犯罪であれ病気であれ、逸脱を自分自身とは無縁な他者の性質と考え、自らを侵害されたり感染させられたりする被害者として表象するとき、人は驚くほど他者に対して残酷になりうる。―（中略）―リスク排除型社会において、リスクの象徴となった人びとへの社会的排除を実行して支持するのは、自らをリスクの被害者と信じて疑わない人びとなのだ。（美馬，2012：105－106）

ここまでの考察から、＜不変モデル＞の契機の輪郭がわかるだろう。学習性無力感に捉われ、男性支配を受容し、それが当然と思っている女性にとって、女性の自立や変化（を促す言説も）は、自らの在り方に対する脅威であり挑戦でもある。その先が想像できないゆえに、それはリスクと映る。彼女らは、未婚者や非婚者をリスク集団として蔑むだろう。それはホモソーシャルな社会が、彼女らが置かれている状況を認知させないために、そうではない（＝男性支配に対抗的で反発する）女性たちをリスク集団化する言説を準備しているからだ。＜不変モデル＞の契機に捉われている女性にとってみれば、未婚や非婚につながるジェンダー論やフェミニズムの言説などは狂気の沙汰である。それは、学習性無力感と劣等コンプレックスによって形成された自己のリスク評価基準に対して、未だ他のビジョンを想像する“力”が育まれていない段階において、変更を迫るものだからだ。＜不変モデル＞の契機は、このようにして発現する。その結果として、ジェンダー論やフェミニズムの言説には頑として「耳を貸さない」女性が生産される。

それは同時に、「未婚者・非婚者」というカテゴリーをリスク集団化し、それに対して激しい嫌悪と高い攻撃性を発揮させることになる。彼女らがもっとも逸脱と感じ、そのような存在になることを恐れる表象でもあるからだ。そして、ジェンダー論やフェミニズムの言説は、彼女らに不当なリスクを負わせ、破滅に引きずり込む「悪魔の言葉」であり、一切かかわらず、耳も貸さない、という態度が最も合理的で正しいものだという確信をうみだすことになる。

いうまでもなくこの契機に対して、男性たちがホモソーシャルな利益を維持したいならば、リスク化された「未婚者・非婚者」の悲惨さ、みじめさを彼女らに吹聴することで充分であり、かつそれが最大の効果をうむことになる。そしてそのような状況下では、劣等コンプレックスはただちに他の女性たちとの「美」の競争を命じることになるだろう。

＜変化モデル＞は、多くの点で＜不変モデル＞とは対照的である。女性である以上、おそらく劣等コンプレックスは共有しているだろうが、その程度はおそらく他のモデルと比べて軽い。同時に他の女性たちと「美」をめぐる競争に没入しなくてもすむ程度には、自らの正統性に自覚的である。学習性無力感も獲得していないか、獲得していても程度は軽い。これらの帰結として男性によってリスク集団化された存在（未婚者・非婚者）への攻撃性は低く、自立や変化へのリスク評

価も低い。その結果、ジェンダー論やフェミニズムの言説への親和性は、それらに触れれば触れるほど高くなる。

一方で、このようなモデルに対してホモソーシャルな男性社会が示す態度は黙殺であり、応答責任（responsibility）の拒否である。なぜなら彼女らの変化を認めたり、それを支持することは、ホモソーシャルな利益の基盤を突き崩すロジックへの途を開くことになるからだ。差別と支配による不当な利益取得を止めるように被抑圧者から求められたり、被抑圧者がそれを求めるような存在に変化する際には、沈黙することで逃避し、相手にしないことで問題化を封じ込め、利益を維持し続ける支配者の態度、すなわち権力的沈黙（野村，2005：144）が、その対応策として頻繁に用いられる。それでも変化をおし留められない場合、次なる手段は、そのような女性たちを“笑い者”にし、揶揄・嘲笑し、蔑み、取るに足らない存在として扱うことである。これはかつて男性メディアがフェミニストたちの言動を報じる際に用いてきた常套手段でもあった。それは支配者側が、“笑い者”にされることこそ抵抗者の意志を最も効率的に挫く方法であることを熟知しているからでもある。そして＜変化モデル＞を“笑い者”に貶めることは、葛藤を抱え続けている＜葛藤モデル＞、すなわち将来において＜変化モデル＞に変わりうる女性たちへの見せしめの効果を副次的にもたらす。ほら、みてみろ、そんな思想にかぶれると、みっともなく笑われ、誰からも相手にされなくなって、孤独の中で瞼を泣き腫らすことになるぞ、というホモソーシャルな男性権力からの警告である。そこで目論まれるのは、男性社会に対抗的な意識を獲得するような女性に対する、徹底的な周辺化、社会・権力構造からの排除である。

これは女性の意思から真正性を剥奪しようとする目論見であり、いわば「サバルタン化」とでも表現されうる戦略である。しかし、そのように変化する女性が一定の割合に達してしまうと、この戦略は意味をなさなくなる。なぜなら、サバルタンは圧倒的に少数だからサバルタンとして排除できるのだから。したがって、＜変化モデル＞に対しては、基本は黙殺し、女性から除外して扱い、その扱われようを他の女性たちに見せつけ、それ以上変化を経験する女性が増えないようにすることが、男性の利益維持のためには肝要であり、そのような戦略が総動員される（されている）のである。

【表：理念モデルと自立阻害契機のマトリクス】

	変化モデル	葛藤モデル	不変モデル
劣等コンプレックス	○	○	○
同胞との闘争（美の競争）	×	○	○
学習性無力感	×	△	○
リスク集団への攻撃性	低	揺れる	高
自立・変化へのリスク評価	低	決定不能	高

＜葛藤モデル＞は、劣等コンプレックスや学習性無力感という視点から見ればより＜変化モデル＞と連続しており、リスク評価という視点からみればより＜不変モデル＞とグラデーショナルに連続している。

このモデルに該当する女性においては、劣等コンプレックスを自身の経験を通じて理解・言語化することもしばしば可能である。その結果として、彼女らは少なくとも他の女性に敵意をもって女性同士の「美」の競争に参入することの不毛さや、それが男性を利するだけのものであることも理解しており、そのような構造を強いる男性社会に対して怒りも感じている。また学習性無力感の克服という点においても、多くの場合、そのロジックを理解し、自身の経験と結び付けて解釈することができる程度には、自分に“力”があると感じている。したがって、これらの側面では、ジェンダー論やフェミニズムに触れれば触れるほど、彼女らの親和性は高く変化することになる。

しかし同時に、リスク評価の側面では＜不変モデル＞との連続性の中に彼女らは位置している。“飢餓リスク”と“孤独リスク”に対して、共に大きな恐怖感を抱いており、ジェンダー論やフェ

ミニズムの諸論点に対する理解が深まるにつれ、その恐怖感との葛藤は大きくなり、場合によっては耐え難いものとなりうる。ロジックによる現状把握という知的理解と、リスクへの恐怖という情動が一致しない状態に置かれてしまうのである。

その結果「頭（理性）ではわかっているけれど、気持ち（情動）がついていかない」という分裂状態が発現しやすくなる。その結果、自立や変化へのリスクの評価も、情報（論理）と情動（恐怖感）の間で揺れ動き、決定不能となる状態も珍しくないと推測できる。またそのような状況下では、「未婚者・非婚者」といった男性によってリスク集団化された存在への攻撃性についても、彼女らに共感を示す時もあれば、反感を示す時もあり、羨望を感じる時もあれば、軽蔑を感じる時もあり、と揺れ動くことになる。

そのような状態の帰結として、情動（恐怖感）および情動が日々変化することへのストレスが負担となり、そのように自分を混乱させる情報を絶ち、思考を停止させることによって自分をストレスから守ろうとする反応が起こっても不思議ではない。これが「ジェンダー論から離れ、男ウケするかわいい女子に回帰する」という現象である。その意味では、＜葛藤モデル＞におけるこのような転向は、一種の自己防衛機制と捉えることも可能と思われる。

一方で、ホモソーシャルな利益を守ろうとする男性たちにとって、彼女らを資源化し、＜変化モデル＞に至らせない方法は、リスクを強調することである。“飢餓（生活苦）リスク”を強調することは、実際に女性の平均所得の低さと未達成感とに組み合わされることにより、女性に埋め込まれていたミソジニーを起動させ、自立への希望を挫き、何事かに挑戦する前に挫折感を味わわせ、挑戦すること自体をあきらめさせ、さらに彼女ら自身の無力感を増大させ、さらに挑戦への意志を打ち砕くだろう。“孤独リスク”の強調は、彼女らに埋め込まれた逸脱への恐怖感を呼び覚まし、真正性を感じにくくさせ、関係性で生きることを余儀なくされてきた彼女らのアイデンティティを喪失させる危機を予感させる。本来は、そのような関係性アイデンティティにとって代わる別のアイデンティティが構想される可能性と余地があるにもかかわらず、情報経路を制限することによって想像力を奪うことができれば、アイデンティティ喪失への恐怖感は、大きな情動となって彼女らに多大なストレスを与えることができる。

問題は、いくぶん明瞭になったように思われる。

焦点は、多くの女性に埋め込まれたミソジニーや劣等コンプレックスを背景とした、学習性無力感や未達成感の克服を目標として設定すること。つぎに、その目標のため、障害となっているリスク評価の偏向を是正することである。そして、そのリスクを正しく見積もることを妨げているのは、リスク評価のための基礎データとなる様々な情報から、彼女らが阻害されている現実である。

学習性無力感やリスク評価の偏向といった、論理と情動の間に存在する齟齬がもたらす問題は、情報経路が制限されていること、そのことを疑問に思わないように様々なポストコロニアルな支配様式が成立していることで維持可能となる。実際、男性のホモソーシャルな権力は、ポストコロニアルな戦略を総動員して、つねに女性たちにリスク評価を誤らせるように誘導し、彼女らの跳躍を全力で阻止しているのである。

ここで、冒頭のファノンの言葉を再度記そう。

「だが戦争は、継続する。」

おわりに―小括に代えて

「4.」で引用した上野千鶴子と小倉千加子の対談部分には続きがある。小倉が、フェミニズムと出会って生き方を変えた結果として生活苦にあえぐことになった元専業主婦たちの姿を見て、フェミニズムの有効性・正当性について悩んだ経験を語った直後の部分で、以下のような会話が交わされている。

上野―でも、その道はご本人が自分で選んだわけでしょ。

小倉—もちろんそうだけど・・・・。責任を感じる必要ないのかな？
上野—離婚して生活苦に陥った人ばかりで、離婚して気持ちよく生きてる人はいないわけ？
小倉—生活苦にあえぎながら、気持ちよく生きてはんのよ。
上野—じゃ、結果的には、ご本人にとってはプラスの選択や。
小倉—そうね、それは、それでいいのかな。
上野—そう。
（上野・小倉，2002：112－113）

確認しておく必要があるのは、リスクは、それが起こる確率を示しえても、その結果がどのようなものであるかを保証するものではない、ということである。リスクは一定の事象が起こるかどうかについての言説であり、それが起こったあとにどのように状態が変化するかを、論理的、因果的、対応的に示すものではない。

たとえば、がんに罹るリスクはある程度は計算可能であろう。実際そのようなリスクに呼応する形でがんが発症したとしよう。リスクという概念で説明が可能なのは、原則的にはその段階までである。がんが発症した後、治療がうまく行って完治するかもしれない（それも確率的には起こりうる）。また、実際に死に至ったとしよう。しかし、その余命を知った患者が、残りの限られた時間をどのように生きるか、あらゆる治療法を試し病気と闘ったのか、あるいは最低限の痛みをコントロールする治療のみを受け、自宅で残りの時間を満喫したのか、そしてそのどちらが本人にとって大きな意義があったと感じられていたのか。あるいはとくに大きな病気もしなかったが、漫然と、大きな満足感を経験することなく長生きして死んだ人と、がんに苦しみながらも精一杯「生」の感覚を満喫し、生きる意味を見出しながら短い人生を閉じざるを得なかった人と、いったいどちらが幸せな「生」を生きたといえるのか。それは本人にしかわからない問題であり、少なくともリスクの言説をもってしては答えることができない問いである。

そういった問題には、そもそもリスクという概念はなにも答えを準備していないのである。それはリスクとはまったく別の次元の、別の問題である。「生活苦にあえぎながら、気持ちよく生きてはんのよ」という状態は、この問題を浮き彫りにする。「生活苦」と「気持ちよく生きる」状況は両立しうる。しかし、リスクという概念はこの両立条件を教えてはくれない。この両立を理解するためには、多様な価値観と生活がありうるという、一種の経験的情報が必要であり、そのような情報に基づいた想像力が必要である。

本稿では、モデルを考えることにより、ホモソーシャルな男性権力のポストコロニアルな支配が、リスクという論点と接合され、女性たちから変化と跳躍の契機を奪う可能性について、論理的な検討を行った。そこでは、リスクをどのように見積もるかをめぐるポリティクスの存在が、輪郭程度ではあるが確認できた。乱暴にまとめれば「自立や解放に対するリスク評価をめぐるポストコロニアルな政治」が主要なテーマであった。しかし、さいごに、このような本稿の枠組み自体を相対化することの重要性を記しておく必要があるだろう。

“飢餓リスク”にしても、“孤独リスク”にしても、それをリスクとしてのみ捉えるならば、ホモソーシャルなポリティクスとの相関関係の中で考え、判断する必要性（または要求）から逃れられない。実際に、未だに、ホモソーシャルな権力（および社会通念）は存続しており、一定の影響力を保持しているのだから。しかし、多くの女性が恐れ、恐怖という情動に振り回されてしまう「リスク」という言説であるが、“飢餓リスク”にしろ、“孤独リスク”にしろ、それが現実化したとして、それは本当に致命的なものなのか、という点には再考が必要である。それは本当に、あたかも死神がやってきて、大きな鎌で首を刈られてたちまちゲームオーバーとなるような事態なのか。そこには苦しみと後悔と敗残感しか存在しないのか。そこには希望や爽快感や躍動感は、本当に存在しえないのか。

そのことを冷静に考えることは、新たな選択のための、大きな発想の転換をもたらすだろう。換言すれば、エンパワーメントとして作用する可能性が指摘できるだろう。そのためには、選択のための多様な事例、一つの価値観の下に統合されてはいない情報を多く得ることが必要となる。これが次の考察に向けての最初の課題である。

もう１つの課題は、“孤独リスク”において認識されている“孤独”の中身が、性的孤独を含んでいるという点に関するものである。それはホモソーシャルな権力が女性に与える承認は性的承認という回路を用いており、“孤独リスク”の核心部分を性愛が占めているという構造が、男性社会によって準備されていることに起因している。しかし同時に、当然ながらそれは異性愛というフォーマットを用いて実践されるものであり、性愛の回路を通じた権力作用でもあり、異性愛的性差別を助長するものである。

この点は、“孤独リスク”の評価基準を女性自立促進的、女性解放的なものに変更しようとする際に、喉の奥に深く刺さった小骨のように、最後まで引っかかる問題として残る可能性がある。多くの女性が異性愛制度を基盤とした性的承認の権力性を自覚できたとしても、それに代わるビジョンが明確ではないために、性的承認がなくなった状況を想像できず、エロスの孤独に突き落とされるのではないかという恐怖感（リスクが増大するという感覚）を呼び起こすものとなってしまう可能性が残る。

この問題を解決するためには、性愛にのみ限定されて表象されがちな“エロス”を、後期フロイト的な、生きること自体によって得られる肯定感、充足感という意味での「生の欲動としてのエロス」として置き換える必要性があるといえるだろう。異性愛の契機を生の充足感の契機に置き換え、生の充足感を性愛中心の権力秩序から解放するための思想と言説が必要である。そのためには、それは本稿で扱ったホモソーシャルな権力作用の延長線上に位置している問題であることを念頭に置きつつ、本稿とはまた異なった議論の土俵で扱う必要があるだろう。そのような議論を実効的なものとして行うためには、生の充足についての多様な事例と、多義的な価値観についての情報、それらを新たな観点から統合する想像力が必要となる。これが次に向けての第２の課題である。

こうして、問題は再び、情報と想像力に戻る。しかしそれは同じ位置に戻るのではなく、らせん階段を登った時のように、跳躍に備えた、風景が異なって見える高度の、しかし出発点と同様な問題群と直面する地点である[9]。

注

１）その過程と女子大学という場が内包する政治性については、拙稿（池田，2004，および2006）においてまとめてあるので、参照されたい。

２）この点について、同様に野村浩也は、サイードの議論を引きつつ、現在における植民地主義は単に「あからさま」でなくなっただけであり、植民地主義は地理的・空間的概念でもなく、歴史的・時間的概念でもなく、植民地の独立の一方で植民地主義は「消えずにとどまっている」という現実から、「ポストコロニアリズム」という概念は導き出されている、と述べている（野村，2005：21－22）。

３）このように、ポストコロニアリズムを、後期近代における地理的空間を超えた拡大された概念として捉えるには、そのテクニック（手法）に注目する必要がある。本稿でその詳細は論じないが、試行としては池田（2005a，2005b）を参照されたい。

４）この鈴木による“S系女子大”に対する考察は、池田（2004，2006）を参照されたい。

５）異性間の親密性にかんする権力の契機については、池田（2008，2009，2010）にて考察したので参照されたい。本稿と重なる部分もあるが、本稿での議論を進める上で必要な論点を、これらの文献との重複を承知の上で、簡潔に示したい。

6）野村浩也は、このような抑圧者のポストコロニアルな文脈での権力維持プロセスを「愚鈍への逃避」と表現している（野村，2005：121－126）。

7）このような場合、単にミソジニーを内面化しているのではなく、自分自身の達成と男性への補佐を天秤にかけて、自身の達成よりも男性補佐によって将来的に得られる利益（配偶者として選ばれる、あるいは当該の“カレシ”ではなくとも男性一般に選ばれやすくなるパーソナリティを作り上げることの利益）を計算した結果の行動である、という意識的な選択と捉えることも、論理的には可能であろう。しかし、それは彼女らのリアリティに比べてあまりに遠大なスケールでの計算であり、またたとえそのような計算があったとしても、ミソジニーの内面化という戦略的本質主義の問題ともかかわる論点とかかわる問題であるため、ここではこのような想定のケースは論じない。

8）セリグマンの犬実験については、セリグマン本人らによるものも含めて様々な紹介文献が存在するが、ウォーカーによる要約が最も要領よく簡潔である。しかしその邦訳が現在は絶版で入手困難であるため、本稿を授業の一部で目にする学生たちの便益を考えて、やや長いが該当する部分を転載しておく。

9）なお、本稿では基本的に大学生等の若年女性を想定して議論を展開した。他方で、中高年女性において、ジェンダー論への拒否感が存在することも事実である。それが世代を超えて（とくに母子関係を介して）若年女性に影響を与えている点にも、分析が必要である。しかし、それらの問題を考察するためには、本稿で論じたものとは別種のリスクの問題に言及する必要があると思われるため、稿を改めて論じたい。

参考文献一覧

Bauman, Zygmunt 2000 *Liquid Modernity*, Polity Press,（藤田典正訳　2001『リキッド・モダニティ－液状化する社会』大月書店）

Bersani, Leo and Phillips, Adam 2008 *intimacies*, The University of Chicago,（桧垣立哉・宮澤由歌訳　2012『親密性』洛北出版）

Fanon, Frantz 1952 *PEAU NOIRE, MASQUES BLANC*, Éditions du Seuil,（海老坂武・加藤晴久訳　1998『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房）

Fanon, Frantz 1961 *LES DAMNÉS DE LA TERRE*, Maspero,（鈴木道彦・浦野依子訳　1996『地に呪われたる者』みすず書房）

Giddens, Anthony 1992 *The Transformation of Intimacy : Sexuality, Love and Eroticism in Modern Society*, Polity Press.（松尾精文，松川昭子訳　1995『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房）

池田　緑　2004「女子大学に勤務する男性教員の政治的位置性」『社会情報研究（大妻女子大学紀要）』13：25－41

池田　緑　2005a「心的傾向としての植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅰ—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』14：55－77

池田　緑　2005b「平等，寛容，想像力，そして植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅱ—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』14：79－99

池田　緑　2006「女子大教員の異常な愛情：または私は如何にして“教える”のを止めて戦場を愛するようになったか」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』15：39－62

池田　緑　2008「承認の政治における男性権力—モノガミーと性愛の植民地主義への基礎的考察—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』17：43－61

池田　緑　2009「親密性の権力と植民地主義—性愛と権力にかんする基礎的考察—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系

—)』18：45－66
池田　緑　2010「承認と親密性をめぐる政治—植民地主義的視点から—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—)』19：1－18
Miller, Jean. Baker. 1986 *Toward a New Psychology of Women (2nd. eds)*, Beacon Press.（河野貴代美監訳　1989『イエス、バット～フェミニズム心理学をめざして』新宿書房）
美馬 達哉　2012『リスク化される身体—現代医学と統治のテクノロジー』青土社
野村 浩也　2005『無意識の植民地主義—日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房
小倉 千加子　2001『セクシュアリティの心理学』有斐閣選書
Peterson, Christopher, Maier, Steven, and Seligman, Martin, 1993 *Learned Helplessness : A Theory for the Age of Personal Control*, Oxford University Press,（津田彰監訳 2000『学習性無力感—パーソナル・コントロールの時代をひらく理論』二瓶社）
Sedgwick, Eve K. 1985 *Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press,（上原早苗・亀澤美由紀訳　2001『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会）
Spivak, Gayatri.C, 1988 *Can the Subaltern Speak?*, University Illinois Press,（上村忠男訳　1998『サバルタンは語ることができるか』みすず書房）
杉橋 やよい　2007「個人研究プロジェクト「ジェンダー統計視点による男女間所得格差の国際比較研究—『男性稼ぎ主型』を考える」の中間報告」『ジェンダー研究』10：117－121
鈴木 淑美　2002「S系女子大生という生き方」『大航海』43：74－82
田中 美津　2004『いのちの女たちへ—とり乱しウーマン・リブ論（増補新装版)』パンドラ
上野 千鶴子　2007『おひとりさまの老後』法研
上野 千鶴子　2010『女ぎらい—ニッポンのミソジニー』紀伊國屋書店
上野 千鶴子・小倉千加子　2002『ザ・フェミニズム』筑摩書房
鵜飼　哲　1998「ポストコロニアリズム－三つの問い」複数文化研究会編『＜複数文化＞のために—ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』人文書院：39－48
Walker, Lenore E. 1979 *The Battered Woman*, Harper & Row,（齋藤学監訳・穂積由利子訳　1997『バタードウーマン－虐待される妻たち』金剛出版）

付記：

本稿を考えるにあたっては、大妻女子大学大学院での授業に参加する機会を与えていただき、学習性無力感他の多くの論点を考えるきっかけをいただいた小倉千加子氏、ある研究会で示唆に富むリスク社会論をご教示いただいた美馬達哉氏、そして日常的に共に考えるための契機を与え続けてくれる大妻女子大学社会情報学部社会生活情報学専攻の学生たちに、多くを負っている。記して感謝したい。

Gender, Risks, and Leap : From a Post-colonial View

MIDORI IKEDA
Otsuma Women's University School of Information-Studies

Abstract

In this paper, I considered conditions which make it possible for women who have encountered gender theory and feminism as a problem of choice under the post-colonial situation acquiring independence and liberation.

Firstly, with reference to the relations of intimacy and male power and the relations of misogyny and homo-sociality, I examined the influence of the inferiority complex and learned helplessness give the choice of women. Then, I showed the structure about the rivalry relations between gender theory and risks. Furthermore, I pointed out that the "power" which women need is a self-actualization capability not power which governs others.

Finally, I propose the politics to be opposed to homo-social power while overcoming risk recognition.

Key Words（キーワード）

Gender（ジェンダー），Post-colonialism（ポストコロニアリズム），Intimacy（親密性），Inferiority Complex（劣等コンプレックス），Learned Helplessness（学習性無力感），Risk（リスク），Self-actualization capability（自己実現能力），Authenticity（真正性），Homo-social（ホモソーシャル），bio-power（生―権力）